

東北アジア学術交流懇話会ニューズレター

うしとら

第58号

● Contents ●

- Topic: Japanese Trading Ships (*Kitamae-bune*) and Economic Exchange in the 19th Century. (ARATAKE Kenichiro) 1
- Northeast Asian Reports: Report of the General Meeting and Annual Open Lecture of the Association for Northeast Asian Studies in 2013. (KIM Hyeonjeong, TATSUMI Yukiko) 2-3
- Members' Forum: Historical Documents Preserved in Japanese Hot Spring Areas. (TAKAHASHI Yohichi) 4



19世紀の北前船と経済交流

東北大学 東北アジア研究センター 准教授
(上廣歴史資料学研究部門)
荒武 賢一朗



私は、日本経済の歴史について研究をしています。現在は19世紀の日本海を中心に、海運と沿岸地域の関係を考えているところです。

古代から日本海およびその沿岸地域では活発な交流があったといわれています。国境を超えて、ヒト・モノ・カネの往来がたくさんあったことが推測できますが、17世紀前半から日本は長崎など一部の港でしか国際貿易ができない時代に入ります。

海外との交易が制限された日本列島では国内流通が活発になり、日本海のあり方にも変化が出てきます。それが現在の北海道から日本海、瀬戸内海を経て大坂を結ぶ「西廻り航路」でした。これらの地域には、北前船(きたまえぶね)と呼ばれる廻船が寄港し(写真1)、北の産物を南へ、南の産物を北へ、といったように経済交流の担い手となっていました(荒武「大坂市場と琉球・松前物」『近世地域史フォーラム1 列島史の南と北』吉川弘文館、2006年)。

北前船が往来する港はたくさんありますが、ポイントになるところがいくつかあります。そのなかで私が注目しているのは、「庄内・飛鳥」(山形県)です。この地域は「越後・佐渡」(新潟県)や「出雲・隠岐」(島根県)と同じように、本州側と沖合に浮かぶ島が対面状態になっているのが特徴です。また飛鳥は、天候に大きく左右される和船(帆船)を遭難から守る役割も持っていました。



写真1. 和船の模型
(兵庫赤穂市・奥藤酒造郷土資料館)

江戸時代の飛鳥に関する情報を集約した「飛鳥資料・飛鳥村資料」(山形県立博物館所蔵「長井政太郎収集資料」)を丁寧に読んでいくと、貴重な情報に目が留まります(写真2)。文化13年(1816)夏、野辺地(青森県)から銅や大豆を積んだ船が摂津国兵庫(兵庫

県神戸市)に向かっていました。しかし、大風によって船体はダメージを負い、沈没させないために荷物の一部も海中へ捨て、なんとか飛鳥にたどりついたようです。ここに積まれていたのは盛岡・南部藩の品物で、銅は尾去沢銅山(秋田県鹿角市)生産とあります。

当初の予定では、兵庫から長崎に運ばれて海外への貿易品として扱われるはずでした。江戸時代の長崎貿易といえば、オランダや中国の船がもたらす「舶来品」が目目されます。一方で、日本からの輸出品には東北地方で生産されたものが数多く含まれていたと想定できます。

船舶の往来を確認するためには、問屋が作成する「客船帳」と呼ばれる資料が効果的です(写真3)。どこの船がいつ港に入り、そして出港するのかを教えてください。鶴岡で問屋をしていた長沢家では、明治25年(1892)に年頭状(年賀状)の発送先を控えた文書を作っていました(鶴岡市郷土資料館所蔵「長沢家文書」)。ここには、長沢家の取引先が一覧になっていて、北海道では函館・江差・小樽など、そして青森県から北陸・山陰地方をめぐる、瀬戸内海から大坂にかけて100名以上の名前が記されています。



写真3. 長井政太郎収集資料「客船帳」(1843年)

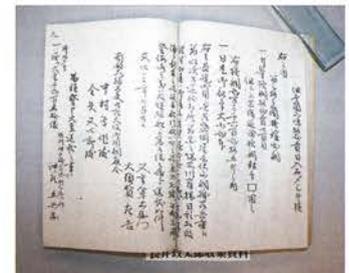


写真2. 長井政太郎収集資料「飛鳥資料」

この地域分布はまさに「西廻り航路」です。明治時代に入ってから数は減少していたかもしれませんが、北前船の商売がおこなわれていたことを示しています。

東北アジア通信

平成25年度 東北アジア学術交流懇話会
総会・定期公開講演会報告

平成25年5月24日(金)に東北大学東京分室にて「平成25年度東北アジア学術交流懇話会総会」が開催されました。本総会では、最初に、平成24年度の活動概況報告が「企画」「総務」「広報」「会計」の順に行われました。まず、平成24年度の企画事業として、同年度理事会(5月7日)・同年度総会(5月25日)のほかに、講師平川新氏(東北大学災害科学国際研究所所長)による「日本とロシアの古文書から見えてくる『帝国』の姿」およびチョローン・ダシダワー氏(モンゴル・ウランバートル大教授)による「写真資料に見るウランバートルの日本人抑留者」の内容で構成された一般公開講演会(5月25日・東北大学東京分室)の開催や、国立大学附置研究所・センター長会議第3部会(人文・社会科学系)シンポジウム「連携する研究所」(10月19日・ウエスティンホテル仙台)への広報協力、講師青野友哉氏(伊達噴火湾文化研究所)・伊達元成氏(同左)を迎えて開かれた「決断の時を迎えて:アイヌ民族の『天災体験』と亘理伊達家中の『移住決意』」と題した東北アジア研究センター主催公開講演会・懇親会(12月1日・仙台市ベルエア会館)の協賛、宮城県委託研究「東日本大震災にともなう被災した民俗文化財調査」(研究代表者:高倉浩樹)の事業報告を

主な目的とした「民俗芸能と祭礼からみた地域振興:東日本大震災にともなう被災した無形の文化調査から」と題した東北アジア研究センター主催のシンポジウム(平成25年2月23日・東北大学片平さくらホール)の協賛が、予定どおりに行われたことが報告されました。

次に、総務関連として、平成25年3月31日現在、個人会員67名(顧問7名を除く)・法人会員6法人の会員状況、さらに、新たな事務員として東北アジア研究センター・コラボレーションオフィスの熊谷香が着任(平成24年6月18日)したことが述べられました。

また、平成24年度の広報事業として、本会のニューズレター『うしとら』第53～56号の発行・配布、東北アジア研究センターのニューズレター『CNEAS Newsletter』第53～55号の配布、(社)ロシアNIS貿易会発行のメールマガジン『Moscow Business News』No.118～126の配信・発送、およびプロシーディング『連携する研究所 国立大学附置研究所・センター長会議第3部会(人文・社会科学系)シンポジウム報告』の配布がそれぞれ報告されました。

最後に、平成24年度の会計について(表1)のとおり決算報告が行われ、平成25年4月11日付の「平成24年度監査

表1. 平成24年度(H24.4.1～25.3.31)決算報告

(単位:円)

	項目	予算額	決算額	増減	備考
収入の部	前年度繰越	3,787,725	3,787,725	0	
	個人会費	300,000	298,000	▲2,000	平成24年度分 240,000円(5,000円×48口)/うち2口会員1名 平成25年度分 10,000円(5,000円×2口) 平成23年度分 30,000円(5,000円×6口) 平成22年度分 3,000円(3,000円×1口) 平成21年度分 10,000円(5,000円×2口) 平成20年度分 5,000円(5,000円×1口)
	法人会費	300,000	250,000	▲50,000	平成24年度分 200,000円(50,000円×4口) 平成23年度分 50,000円(50,000円×1口)
	寄付金	0	0		
	雑収入	600	36,495	35,895	みちのく銀行利息(H24.8.19付) 271円 みちのく銀行利息(H25.2.17付) 224円 5月 懇親会会費 22,000円(1,000円×22名) 12月 懇親会会費 14,000円(1,000円×14名)
	収入合計	4,388,325	4,372,220	▲16,105	
支出の部	広報費	500,000	302,400	197,600	うしとら51号、52号印刷代(各6P 4C 300部) 116,550円 うしとら53号 〃 (4P 4C 300部) 44,100円 うしとら54号 〃 (6P 4C 300部) 53,550円 うしとら55号 〃 (4P 4C 300部) 44,100円 うしとら56号 〃 (4P 4C 300部) 44,100円
	講演会費	350,000	344,500	5,500	5/7 理事会交通費(越谷-仙台) 23,540円(吉田理事) 5/25 講演会・総会会場費(東京) 52,000円 懇親会 99,500円(3,980円×25名) 役員・講師交通費 84,560円(講師、吉田副会長、徳田理事、岩山) 12月 講演会懇親会(仙台) 84,900円(4,500円×16名、他追加7名分)
	会議費	50,000	19,218	30,782	1/21センター外部評価 19,218円
	謝金	500,000	404,763	95,237	事務局員人件費(岩山健三) 258,133円 〃 (熊谷香) 146,630円
	通信費	80,000	66,305	13,695	郵送料 46,670円 切手代 2,680円 はがき代(5月総会出欠及び委任状50円×60枚) 3,000円 振込手数料(25件分) 13,755円
	事務用品費	50,000	130,988	▲80,988	事務局PC入替代 89,985円 事務用品 38,003円 バスカード(3,000円×1枚)
	会員費等	210,000	214,000	▲4,000	(社)口NIS貿易会(MoscowBusinessNews購読料) 64,000円 (公)環日本海経済研究所(ERINA) 50,000円 北陸環日本海経済交流促進協議会(北陸AJEC) 50,000円 (特)日口交流協会 50,000円
	次年度繰越金	0	2,890,046	0	
	支出合計	1,740,000	4,372,220	257,826	

東北アジア通信

報告書」が提出され、承認されました。

新たな平成25年度活動計画として、平成25年度総会・一般公開講演会・懇親会の開催（同年5月24日・東北大学東京分室）、同年東北アジア研究センター主催公開講演会・懇親会の協賛（12月・仙台市内予定）、本会のホームページ更新、本会ニューズレター『うしとら』第57～60号の発行・配布や、東北アジア研究センター諸事業に対する種々の支援が提案され、認められました。以上とともに、満場一致で承認された平成25年度の予算書は（表2）のとおりです。

最後に、平成25年4月1日から新しい東北アジア研究センター長が就任したことにより、本会の役員の変更も行われ、理事長は佐藤源之氏から岡洋樹氏に、総務担当理事は岡洋樹氏から明日香壽川氏にそれぞれ替わりました。

（文責：金 賢貞）

表2. 平成25年度（H25.4.1～26.3.31）予算書

（単位：円）

項目	H24年度決算額	予算額	備考
前年度繰越	3,787,725	2,890,046	
収入の部			
個人会費	298,000	320,000	個人会員 62名(64口) × 5,000円
法人会費	250,000	300,000	法人会員 6法人 × 50,000円
寄付金	0	0	
雑収入	36,495	30,000	預金利子 懇親会会費
収入合計	4,372,220	3,540,046	
支出の部			
広報費	302,400	400,000	うしとら57～60号印刷費 ホームページ更新費用
講演会費	344,500	350,000	5/10 理事会 : 役員交通費 5/24 講演会・総会 : 会場費、役員・講師交通費、懇親会費 12月 講演会 : 懇親会費
会議費	19,218	20,000	
謝金	404,763	200,000	
通信費	66,305	70,000	うしとら、MoscowBusinessNews等郵送料 振込手数料
事務用品費	130,988	35,000	事務用品、角2封筒1,500枚(22,050円)、 電卓(1,000円×2台)、パスカード(3,000円)
会員費等	214,000	214,000	(社)口NIS貿易会(MoscowBusinessNews購読料) 64,000円 (公)環日本海経済研究所(EPINA) 50,000円 北陸環日本海経済交流促進協議会(北陸AJEC) 50,000円 (特)日口交流協会 50,000円
雑費※追加	—	20,000	
小計	1,482,174	1,309,000	
次年度繰越金	2,890,046	2,231,046	
支出合計	4,372,220	3,540,046	

講演会「すぐそのロシア 隣人の今」

平成25年度「東北アジア学術交流懇話会定期公開講演会」が、5月24日に東北大学東京分室で開催された（写真1）。今年度は「すぐそのロシア 隣人の今」と題して、現代ロシア情勢に詳しい横手慎二先生（慶應義塾大学）と本村眞澄先生（石油天然ガス・金属鉱物資源機構）のレクチャーをうかがった。

横手先生（写真2）は、「ロシアの異質性と世界」とのタイトルで、ロシアを異質な国家だとするイメージの形成要因を知ったうえで、対ロシア外交を理解する必要性を指摘した。すなわち、19世紀西欧の国際関係においては、ロシアは皇帝専制による反動的体制をとるために、またはアジア的性格を持つために、あるいは類例のない規模の国土を有するために、「我々とは異質な国家である」とする見解が形成された。こうしたロシア異質論は、偏見に満ちたステレオタイプなイメージだと批判されてきたにもかかわらず、プーチンという強力な指導者の登場以来、再び人口に膾炙している。それは、新たな国際秩序の構築のために諸勢力の利害が衝突する現在、国際政治において、ロシアを西側の自由民主主義の共同体の外に置こうとする力学が働いているからなのである。

本村先生（写真3）は、「変容する北東アジアのエネルギー



写真1. 平成25年度東北アジア学術交流懇話会公開講演会



写真2. 横手慎二先生



写真3. 本村眞澄先生

フロー」とのタイトルで、ロシアからエネルギー資源の供給を受ける日本の立場が、必ずしも弱くないことを説いた。すなわち、従来の地政学においては、エネルギー資源の供給国と需要国は支配・被支配の関係にあるという理解があった。それに従えば、欧州や極東にパイプライン網を構築して天然ガスを供給するロシアは、日本を含む需要国に対して強い立場にあると言える。しかし実際には、天然ガスは他の燃料との競争があるため、供給国が一方的にパイプラインを止めて政治的圧力をかけた場合、需要国は他の燃料へと移行することによって対抗が可能である。こうした対抗関係の現れが、2006年および2009年のロシア・ウクライナ間の天然ガス紛争だった。日本は、このような原理を理解して消費国としての立場を利用しながら、極東における国際パイプライン網への連結戦略を構想する必要がある。このように今回の講演は私たちに、日頃から抱いているロシア・イメージを再考させ、日口関係についてより深く考えることを促す刺激的な内容だった。仙台を離れての開催にもかかわらず満席だった会場からは、多くの質問が出され、お二人の講演者との間で活発な討議が行われた。

（文責：巽 由樹子）

会員の広場

東北アジア学術交流懇話会

お互いの交流拡大を目的に、会員皆様の近況・ご意見などを発信していただくスペースです(不定期)。
 今回は、東北大学東北アジア研究センター・上廣歴史資料学研究部門の高橋陽一助教に現在主に行っている研究内容を紹介していただきました。高橋助教は、日本の一般民衆が比較的自由に各地を旅できるようになった近世時代の旅のあり方を、当時の紀行文や道中日記などの文字記録の分析を通して究明することに取り組んでいます。

温泉に残る古文書

東北大学 東北アジア研究センター 助教 高橋 陽一
 (上廣歴史資料学研究部門)



江戸時代は旅の時代である。現代的な観光旅行の原型(物見遊山)がみられるようになったのもこの時代であると言われる。寺社、名所旧跡、都市(江戸や上方)のほか、温泉もまた代表的な目的地であった。



写真1. 土蔵内の古文書探索

温泉旅行と聞くと、観光・レジャーのイメージを抱く人が多いだろう。もちろん、江戸時代も後期(18世紀後半)になれば、そうした目的の温泉利用がみられるようになるが、主流であったのは1~3週間の長期滞在による療養である。温泉が学術的見地から着目され始めるのは、およそ17世紀後半からであり、19世紀には全国の温泉の効能を紹介した見立番付も刊行され、どこの温泉がどのような症状に効果があるか、広く知られるようになっていた。

こうした温泉利用の性格や温泉運営の実態は、現代的・日本的な温泉の系譜を考える上で注目すべきのだが、これまで意外なほど知られていなかった。江戸時代の温泉に関するまとまった文献の発掘と解析が進められてこなかったからである。これに対し、私は大学院生時代から宮城県内の秋保、川渡温泉や群馬県の草津温泉の古文書調査を行い、当時の温泉運営の特質を論じた成果を発表してきたが、昨年、研究を大きく進展させる可能性を秘めた古文書に巡り会った。仙台藩領であった宮城県柴田郡川崎町(旧前川村)の佐藤仁右衛門家文書である。

佐藤家は、江戸時代を通じて青根温泉の湯守(温泉管理人)を務めていた。現在も温泉旅館を経営する同家には多数の古文書が残されており、2012年5月から3度にわたって、NPO法人宮城歴史資料保全ネットワークによる調査が実施された。調査には私も同行し、御殿(別館)に展示、所蔵されている古文書をデジタルカメラで撮影し、



写真3. 佐藤仁右衛門家文書②(仙台藩主伊達吉村の俳句)

長期保管用の封筒に詰める作業や、土蔵内での古文書の探索に携わった(写真1)。後に撮影画像を確認したところ、古文書の点数は御殿収蔵分だけで約2000点に上ることが判明した。年代は江戸時代初頭から明治時代以降にまでまたがっている(写真2)。

佐藤仁右衛門家文書の特色を3点指摘しておきたい。まず1点目は、仙台藩主との関係を示す古文書が含まれていることである。青根温泉には歴代の仙台藩主が度々入湯に訪れており、同家には4代藩主伊達綱村の書状や、5代藩主伊達吉村の句が現存している(写真3)。2点目は、日記や用留(ようどめ)が含まれていることである。仙台藩の各温泉の歴史は、これまで断片的にしか把握できなかったが、青根温泉に関しては、これらの簿冊形態の古文書により、温泉運営の諸相を通時的に把握することが可能になる。3点目は、村内外の住民との関わりを示す古文書が多数含まれていることである。具体的には、金品の取引関係書類や証書類、書簡類であり、こうした古文書から、全国的にもほぼ未解明である、江戸時代の湯守・温泉宿の日常的な実際範囲や、温泉営業における必需品の入手ルートなどが明らかになるだろう。

以上の中で、私が特に注目したいのは3点目である。現代の温泉は、すべてが江戸時代から続いているわけではないが、老舗と呼ばれるホテル・旅館には江戸時代創業のものも多い。長く人々から親しまれる秘訣は、旅行者との関係のみならず、地域社会における存在のあり方にもあったはずだ。江戸時代から残る温泉・温泉宿がいかんにして発展し、存続してきたのか、周辺地域と取り結んでいた関係に着目しながら、この点にアプローチしていきたい。

なお、調査成果の一端は、『江戸時代の温泉と交流—陸奥国柴田郡前川村佐藤仁右衛門家文書の世界—』(東北アジア研究センター叢書)として発表する予定である。



写真2. 佐藤仁右衛門家文書①

EDITOR'S NOTE
編集後記

今回は上廣歴史資料学研究部門の先生方による日本特集である。私は前任の金沢大学に22年間勤めたので北前船には親しみがある。金沢市金石(かないわ)には「海の百万石」と言われた銭屋五兵衛の記念館がある。飛鳥には今年5月地質調査に行ってきたが、高価な望遠レンズをかついだバードウォッチャーで混雑していた。一方、温泉と言えば、鈴木牧之の北越雪譜(1837年)に、自噴する天然ガス(地火)で湯をわかす越後の温泉が記されている。西洋では温泉を飲んで病気を治すのが一般的だが、日本は入浴一辺倒で温泉を飲む文化が育たない。「ミネラルウォーター」は普通の水ではなく、もともと温泉や鉱泉の水のことである。この特集を読んでいろいろ思考を拡げていただければ幸いである。(石渡 明)

"Ushitora" is a Japanese word for the "Ox-Tiger"; Northeast in the Chinese animal zodiac. (A.I.)

《うしとら》(東北アジア学術交流懇話会ニューズレター) 第58号 2013年9月25日発行

発行 東北アジア学術交流懇話会

〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内41

PHONE: (022)795-7580

http://www.cneas.tohoku.ac.jp/gon2/

東北大学東北アジア研究センター 気付

FAX: (022)795-7580

E-mail: gon@cneas.tohoku.ac.jp